

## 高校生区分

## 佳作

沖縄県

## 特別支援学級へ通う生徒への偏見について

沖縄県立前原高等学校 二年  
栄門 和音

みなさんは、「特別支援学級」や「特別支援を受けている人々」に対して、どんなイメージを持ちますか。また、自分の身近にいる人が特別支援学級に通っていたら、どういう気持ちや態度で接しますか。ほとんどの人は今までと変わらず、その人の「個性」として認め、普通に接すると思います。しかし、一部には「個性」を認めず、見下すように接したり、あきらかに他の人々とは違う態度で接する人たちがいます。

私は二卵性双生児で、同じ年齢の姉がいます。私たちは幼稚園、小学校と友だちと毎日楽しく過ごしていました。小学校高学年に上がる頃、姉は軽度の「発達障害」と診断されました。発達障害とは、生まれつき脳機能に偏りがあることで、コミュニケーション能力や社会性が苦手、特定の学習に困難を感じるなど、日常生活に支障をきたす状態のことを指します。その他は、普通の人たちと何も変わらないため、周りから見

ても少し分かりにくい部分もあります。私の姉も、対人関係と勉強、コミュニケーションが少し苦手なだけで、その他は私と何も変わりませんでした。

軽度の「発達障害」と診断された姉は、「特別支援学級」に通うことになりました。特別支援学級は、姉のように発達障害を持っている人や、生まれつき身体が不自由な人、誰かの助けが必要な人が通う学級です。姉が特別支援学級に通うようになると、周りの環境が変化していききました。初めは仲が良かった友だちからいじられたりする程度でしたが、次第にエスカレートしていき、物が隠されたり、壊されたり、仲間はずれにされたりなど、いじめになっていききました。私もいじめに巻き込まれることがありました。無視をされたり、影口を言われたりして、とても苦しかったのを覚えています。学校に行きたくないと思ったこともありましたが、仲の良い友だちと一緒に居てくれたことで、

頑張ることができました。いつの間にか、私へのいじめはなくなっていました。姉へのいじめは続いていました。

中学一年生のとき、姉が泣きながら両親と話しているのを見ました。

「自分にはみんなが言う普通が分からない。普通ってなに？」

その言葉を聞いて、私はとても苦しくなりました。なぜ周りと少し違うというだけで、姉が傷つかないといけないのか。なぜ私たち家族が苦しまないといけないのか。今でもその事を考えて生活しています。

障害には、身体機能に関わる、周りの人が気づきやすいもの、発達障害のように、周りの人が気づきにくいものと、いろいろなものがあります。程度や持っている障害が違うとしても、全部含めて一人の人間です。それを認めることができないと何も始まりません。障害を持っていない人も「自分が普通だから」といって偉いわけではありません。運良くなに不自由のない身体に生まれているだけです。

「二人の人間としてその人を認める」ことが、これからの社会に大切なことだと私は考えます。

現在、姉は特別支援学校へ通っています。その中で友だちと毎日楽しそうに生活しています。ですが、姉

が言っていた「普通ってなに？」という言葉が、私の中でずっと残っています。姉のように、周りと少し違うからという理由で苦しい思いをしている人、私のように支援を必要とする人が身近にいる人々が傷つかな社会をつくるためにはどうしたらいいか。これから先、このような人々が少しでも減っていつてくれることを願います。

## 高校生区分

## 佳作

大阪市

## バスの中で見つけた優しさ

ルネサンス大阪高等学校 二年  
おさき ゆいか  
尾崎 結花

私は、人と人とのつながりや思いやりについて考えることがある。日常生活の中で、私たちはさまざまな人とすれ違い、時には助け合いながら過ごしている。しかしその大切さは、普段はなかなか意識することができない。けれど、ある日の登校日、私はその「思いやり」を強く感じる体験をした。それは、バスの中の出来事だった。今でもそのときの温かな気持ちをはっきりと思い出すことができる。

その日、私は登校日のためバスに乗った。いつもより少し混んでいたバスの車内に座り、窓の外を眺めながら学校に着くのを待っていた。すると、次の停留所で一人の車いすの人がやって来た。私はその瞬間、「どうやってバスに乗るのだろう」と不安に思った。大きな段差のあるステップを車いすで上るのは難しいように思えたからだ。けれど、次の瞬間、運転手さんがすぐにバスを止め、慣れた様子でスロープを取り付けた。

れていた。私はその様子を見ながら、自分まで優しい気持ちに包まれていくのを感じた。

それまで私は、車いすの人がバスに乗る場面を実際に見たことがなかった。テレビや本で見るとはあっても、自分がその場に居合わせるのは初めてだった。正直に言えば、最初は「時間がかかるのではないか」「周りの人がどう思うのだろう」などと少し不安な気持ちを抱いていた。しかしその心配はすぐに消えた。そこにあったのは、周囲の人たちが当たり前のように協力し合う姿だったからだ。

私は気づいた。私が勝手に「大変そう」「迷惑になるかも」と思い込んでいただけで、実際には自然に助け合える場がそこにあった。運転手さんも、乗客の人たちも、誰一人としていやな顔をせずに協力していた。その雰囲気の中で車いすの人は安心して座り、周りの人も笑顔で過ごしていた。ほんの短い時間だったが、私にとって大切な学びの瞬間になった。

私はその出来事を通して、「障がいがある人となない人」という区別を意識するよりも、「同じ空間にいる人同士」として向き合うことが大切だと感じた。おばあさんが席を譲り、そのおばあさんにさらに席を譲った人がいたように、思いやりの連鎖は広がっていく。そこにあったのは「特別な助け合い」ではなく、ごく

さらに車いすが安全に乗れるように、バスの座席を畳み始めた。私はその動きに思わず見入ってしまった。

その席には、一人のおばあさんが座っていた。年齢も高そうで、立ち上がるのは大変そうに見えた。私は心の中で「どうするんだろう」と少し心配になった。しかしおばあさんは迷うことなく席を譲り、自ら立ち上がった。その姿を見て、胸の奥にじんとするものを感じた。けれど、それ以上に私の心を温かくしたのは、その後に起こったことだった。

おばあさんが立ったのを見ていた周りの人が、すぐに席を譲ろうと動いたのだ。ある人は「こちらへどうぞ」と声をかけ、自分の席を空けた。おばあさんは安心したように微笑んで、そこに座った。その光景は、言葉にしくなくても人と人との自然に支え合っている瞬間だった。車いすの人も周囲の協力を受けて安心して座ることができ、バスの中にはどこか温かな空気が流

自然な「心の輪」だった。

こうした思いやりの姿を目にして、私は「人は一人では生きられない」ということを改めて実感した。普段は自分のことで精一杯になってしまいがちだが、少し視野を広げれば、困っている人に手を差し伸べたり、誰かを気づかうことができる。私もまた、そうした一員でありたいと思った。

これからの私は、そんな心の輪を広げていける人でありたいと思う。次にもし同じ場面に出会ったら、今度は私が声をかけたり、席を譲ったりしたい。小さな行動でも、それがきつと誰かの安心につながるはずだ。そしてその一歩が、社会全体を少しずつ優しくしていくのだと思う。

また、この経験は学校生活にもつながっていると感じる。教室や廊下など、身近な場所でも同じように助け合いは生まれる。例えば忘れ物をした友達にノートを貸したり、困っている人に声をかけたりする。そうした日常の小さな行動こそが、人と人との関係を温かくしていくのだと思う。

日常の中にこそ、心の輪は生まれている。私はこれからも、その小さな温かさを大切にして生きていきたい。

## 高校生区分

## 佳作

茨城県

茨城県立鉾田第一高等学校 三年

菊地 心愛

## 特別じゃなくて普通に

私には、二歳年下の弟がいる。いつも家族を笑わせてくれて学校でも人気者。明るくて友達も多くて、私の自慢の弟だ。

そんな弟には生まれつきの障がいがある。先天性の合指症という病気で、両足の指がくっついていて。弟が二歳のとき、くっついていた指を離す手術を受けた。何時間にも及ぶ大手術だったらしい。当時の私はまだ幼く、なぜ弟が入院しているのかも、両親が涙を流して喜んでいる理由もわからなかった。

半年後、弟が退院して帰ってきたとき、弟の足には大きな手術痕が残っていた。それを見て、私は思わず「宇宙人みたい」と言ってしまった。誰からも責められなかったけれどその言葉は自分でも忘れられず、今でも胸に小さな棘のように刺さっている。

その日から私は、弟と遊ぶときにはできるだけ足を使わない遊びを選ぶようになった。弟が無理に動かな

思ったが、弟は私の心配をよそに楽しそうにグラウンドを駆け回っていた。最初はぎこちなかった動きも練習を重ねるうちにどんどん上達し、気がつけばレギュラーを任されるまでになっていた。私は観客席から弟のプレーを見ていた。白球を追って走る姿は、以前の弟とは思えないほど力強かった。足のことなんて感じさせないくらい生き生きとプレーする弟の姿に私は胸が熱くなった。

弟は障がいを持っている。けれど、それに縛られていない。きつと最初からそうだったのだ。守られるべき存在、かわいそうな存在と決めつけていたのは私だったのだ。きつと世の中にも私と同じように、相手のためと思いながら、知らず知らずのうちに線を引いてしまっている人がたくさんいるのではないだろうか。障がいがある人に対して「優しくしなければならぬ」「守ってあげるべき」と思う気持ちは決して悪いものではない。でもその優しさが相手の可能性を狭めたり、自立する力を奪ってしまうこともある。本当に必要なのは、障がいの有無に関わらず、お互いをひとりの人間として尊重する姿勢だと思う。私たちにできるのは、助けることではなく、理解すること。必要な時に必要な手を差し伸べながらも、対等な人間同士として関わっていく。相手のことを見て、その人の声

くても良いように、私なりに気を遣ったつもりだった。弟が小学校に上がるとき、私は密かに心配していた。周囲から「足が変だ」「みんなと違う」などと言われて、いじめられてしまうのではないかと。姉として私が守ってあげなければという責任感もあったと思う。しかしいじめられるどころか、弟は持ち前の明るさで友達をどんどん作り、毎日楽しく学校に通っていた。

そんなある日、弟に「特別扱いしないで」と言われた。弟を障がい者というレッテルでみていたのは、他でもない私だったのだ。弟のためだと思ってしていたことは、弟をかわいそうな存在として扱ってしまったのだのかもしれない。そのことに気づいてから、私は弟をひとりの人間として自然に接するように努力した。

弟は高学年になると野球を始めた。ポジションは外野。走る機会も多く、足に不安のある弟には大変だと

に耳を傾ける、それが本当の意味での共に生きる社会への第一歩なのだと思う。

弟は私の誇りだ。私が弟から学んだのは、違いは決して、劣っていることではないということだ。身の回りの違いに気づき、それを受け止めることから始めよう。無意識の偏見や思い込みは、誰の中にもある。でも、それに気づいた時こそ変わるチャンスだ。弟の姿は、気づきを私に与えてくれた。小さな歩みでも、一人ひとりが意識を変えれば、社会はきつと少しずつ変化していく。弟のように前向きに、そして自分を信じて生きていく人がもっと生きやすい世の中になるように、私も自分にできることを行動に移していきたい。これからの社会が、誰もが自分らしく生きられる場所になるように私自身も、まずは身近な人との関わりを見つめ直していきたい。

小さな気づきが、大きな変化を生むと信じている。

## 高校生区分

## 佳作

静岡市

静岡県立静岡商業高等学校 三年

櫻井 彩葉

## プールで出会った女の子

私が「心の輪」を実感したのは、通っているスイミングスクールでの体験でした。私は幼稚園のころから水泳を続けており、高校生になった今までも週5回以上練習をしていました。水泳は個人競技である一方、リレーや練習中の空気など、仲間との協力や支え合いも大切なスポーツです。その中である一人の子との出会いが私の考え方を変えてくれました。

その子は、小学生で聴覚に障害がある女の子でした。最初にプールサイドで見かけた時、コーチがジャスチャーで説明をしていたのが印象的でした。女の子は言葉を発することは少なかったけれど、私たちよりも一生懸命にコーチの動きを見つめていました。私にとっては初めての出会いであり、「どうやって接したらいいんだろう」と少し戸惑ってしまいました。

ある日の練習で、たまたま同じレーンに入ることになりました。スタートの合図は普段なら「よい、ハ

イ」という掛け声だけど、女の子には聞こえません。コーチは代わりに旗を振って合図を出していました。最初はその違いを意識してしまい、私はうまくタイミングがつかめませんでした。しかし女の子は私にっこりと笑いかけて、手で「一緒にスタートしよう」と言ってくれました。その笑顔に、私は不思議と緊張がほぐれ、「声で話さなくても伝わるんだ」と感じました。

練習を重ねるうちに、女の子とのコミュニケーション方法も少しずつ身につきました。水の中では言葉が届かないのは当たり前なので、アイコンタクトやジェスチャーで気持ちを伝えることが大切です。私は練習中にビート板を指さして「次はこれで行こう」と示したり、タイムを見せてもらって「すごいね」と伝えたりしました。女の子も、ゴールした後に大きくガッツポーズをしてくれるなど、言葉以上に心が通じ合っていることを感じました。

印象に残っているのは、リレー練習をしたときのことです。女の子は一泳になり、私は二泳でした。私はちゃんと引き継げるか心配だったけれど、女の子はスタート前に私の方を向いて強くうなずいてくれました。その姿に背中を押され、私も全力で泳ぐことができました。ビート板を受け取った瞬間、女の子の目が「頼んだ」と語りかけているようで、私は自然と笑顔になっていました。結果は一位ではなかったけれど、ゴールしたときの一体感は、どんな勝利にも負けない大切な経験になりました。

この体験を通して、私は大切なことに気づかされました。私たちのように言葉を話せなくても心は通じ合えるということです。障害があるからといって、特別扱いする必要はないと思いました。相手のことを理解しようとする気持ちと、一緒に挑戦したり楽しもうとする姿勢があれば誰とでもつながることができるのだと学びました。たとえ環境が違ったりしても、少しの工夫と勇気があれば人と人はつながれます。その「心の輪」を、私はプールから社会へと広げていきたいです。

## 高校生区分

## 佳作

滋賀県

わたしの声が届く場所<sup>こえ とど ばしょ</sup>学校法人角川ドワンゴ学園N高等学校 二年<sup>がっこうほうりんかくかわどわんごがくえん</sup>野口 晴歌<sup>のぐち はるか</sup>

通信制高校、そう聞いてどんなことを思い浮かべるだろうか。通信制高校と聞くと、ネットで学習する学校、というイメージを持つ人が多いかも知れないが、私は通学コースというコースを選択し、週三日キャンパスに通って学習をしている。

私が通うキャンパスには様々なひとがいて、大きい音が苦手なひと、朝に体調を崩しやすいひと、人混みが苦手なひと、強い香りが苦手なひと、障がいを持っているひと、ヘルプマークをつけているひと、LGB TQに当てはまるひとなど、年も性格も全く違うけれど、みんなそれぞれお互いに「様々」を理解しあって生活している。そんな私たちの暖かい通信制高校の生活を伝えたい。

私は吃音症という障がいを持っており、物心がついた時から今まで、ずっとこの障がいと一緒に生きてきた。吃音は、話そうとした時に言葉が詰まったり、

連発してしまったり、音が伸びてしまったりする発話障がい、多くは幼少期に発症し、成長とともに数年で治っていくとされているが、私のように成長しても症状が残る人もいる。吃音は当事者によって症状が異なり、医学的な治療法もなければ、発症するきっかけも分からない、未知の障がいなのだ。

小学校低学年のころ、自分の喋り方が周りの子と少し違うことに気づいた。高学年になれば、言葉を変えたり、えーっと、などの言葉をはさんだりして吃音を隠すようになっていた。しかし、吃音を隠すことが日常になったため、ふとした時に出た吃りが違和感を覚えさせてしまい、

「どうしたの？」

「大丈夫？」

とよく言われた。中学時代は吃音のことを知っている友人や先生にだけ打ち明けて生活していたが、教科書

の音読の時間や、グループワークの時間などは正直とでもやりづらかった。吃った時の視線や笑い声を出してしまったり、学校に行くのが嫌になってしまった時期もあり、先生と相談しながら別室で授業を受けた日もあった。中学三年生の春、進路について考え、自分を今一度見つめ直した。私は、これからずっとこんな風に吃音に縛られたまま生きていくのだろうか。そんな生き方はしたくない。もっと胸を張って生きたい。そう思って、自分の新しい道として選んだのがこの学校だ。

私の学校にはキャンパスに通わないネットコースもあるが、私が通学コースを選んだのには理由がある。通学コースでは五教科の授業よりも、人と話す・触れ合う授業がメインだ。チームになって一つの成果物を作る、一つの課題について調査する、一つのテーマに沿って議論するなど、学年問わず、みんなで関わり合いながら授業を受けることができる。私はこの機会を活かし、人と話すことに対するマイナスな気持ちをプラスに変えていきたいと思い、通学コースへの進学を決めた。

無事入学試験に合格し、行きたかったキャンパスへ通えるようになった高校一年生の春。誰とも話したことのないまま始まった高校生活に緊張しているなか、

自己紹介の時間がやってきた。自分のターンになって、誕生日である五月を言おうとした時、吃りが出た。昔から「五」が上手く言えず、いつも手で表現してごまかしていたのだ。前向きな気持ちで入学したが、またここで吃音を笑われたら、と考えて冷や汗をかいた。しかし、誰も私のことを笑わなかった。優しい表情で私が話すのを待ってくれて、誕生日を言い終わったら拍手をしてくれた。嬉しくて、涙が出そうになった。私が吃音症を持っていることはもちろん誰も知らなかったし、その場にいた全員が私と初対面だった。それなのに、今までにない暖かな空気の中で、私の声が届いている。そう実感することができた。

まだ吃りは出るし、ぎこちない部分もあるけれど、キャンパスのみんなはちゃんと私の話を最後まで聞いてくれる。キャンパスのみんなが創り出した暖かい場所のおかげで、今では授業のプレゼンや発表をしたり、苦手だったグループワークも率先して話をできるようになった。

このキャンパスは本当にすごい。休み時間も大きな声や音は出さず、午後に登校してきた子にも「おはよう」と挨拶をする。周りの子の体調の変化にすぐ気付いたり、メンターさんやアシスタントの大学生の方もいつも私たちのことを優しく見守ってくれる。入学し

てからまだ日は浅いが、こんな暖かな光景を何度も見ている。お互いに障がいや病名について深く聞いたり  
はしない。障がいや病気があっても、なくても、きつ  
とみんな心の輪でつながっているのだ。

自分で選んだ新しい人生の一步目、通信制高校。私  
の障がいを認めてくれたすべての人に感謝をこめて、  
学校生活を精いっぱい謳歌したい。